

人間的生命の出生をめぐる哲学的人間学の試み

金子 昭

はじめに

一 “人間” 生命と人間 “生命”

ラントマンは、「人間は自然により半ば仕上げられて放り出され、あとの半分の仕上げは人間自身に任せられた」と述べた。^① 出生とは、まさに自然のままの人間が人間自身に任される瞬間でもある。生命にアクセントを置いてこれを見れば、母胎内の潜在的生命がこの世界へと顕在化し、世界と人間とにつながる出来事となる。出生によって、新たな生命は人間的生命として承認されるのである。生命を最も包括的に捉える思想として生の哲学があるが、超越的な存在の相の下に見られた生命をとくに「いのち」と呼ぶ。人間の「いのち」には独自の人間学的要素がある。

上述のような観点から、本報告では、出生と生命の関わりについて哲学的人間学の試論を行いたい。

今日、狭義の哲学的人間学と呼ばれる思想としては、シェーラー、プレスナー、ゲーレンなど、一連の二〇世紀前半のドイツ人哲学者による探究が挙げられるだろう。その際、探究の重要な手掛かりとして用いられているのは、人間の生物学的研究である。そこから、人間生命の問題を扱うには、人間と他の生物（動物）との差異が問われてくる。

動物学から人間学を論じたポルトマンは、「人間は生後一歳になって、真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態に、やっとたどりつく」と述べた。^② 生後一年間は、子宮外妊娠期間（社会的妊娠期間）ともいうべき期間である。この期間に、ヒトとしての自然な発達とともに、社会的存在としての人間的存在に生育していくことになる。出生とは、それ自体が地続き

の現象であるところの、子宮内妊娠期間と社会的妊娠期間とはさまの出来事なのである。

ポルトマンは、人間の子供は幼少の時期に、一回きりで二度と繰り返せない歴史的出来事が起こるとも述べている。^④この歴史的過程はその子供にとっての社会や文化により訓育を受ける過程である。こうした一連の過程こそ、人間的出生の過程であるとも言える。緩やかな成熟と文化的な育成（教育）が調和して互いに重なり合っていると、人間の生育の特徴がある。出生は誕生の瞬間に完結してしまうものではない。人間としての出生はその後も続いていくのである。

そこであらためて焦点となるのが、そもそも人間とは何であるかという問題である。この問題提起は「人間の本質」を問う。人間をして人間たらしめる本質定義については、思想史の中でさまざまな解答が提出されてきた。ラントマンはこれを人間的特質 anthropion と呼んだが、これには外面的なもの（直立歩行、道具使用など）もあれば、内面的なもの（善悪、羞恥の念、文化を有するなど）もある。^⑤しかし、これらあまりに多様である上、個々の特質の幾つかやその前段階のものは他の動物にも見られる。これらのどれをとっても、「人間の尊厳」をもたらず決定的なものになっていないとは思にくい。フクヤマはそうした人間の本質をX因子 Factor X と名付けたが、これについて次のように注意を促している。

X因子は道徳的選択、理性、言語、社会性、直覚、感情、

意識、あるいは人間の尊厳の根拠として示されてきた他の資質のどれか一つに還元できない。人間の全体にこれらあらゆる資質が集まって、X因子となるのである。^⑤

ここでは、あれこれの人間の本質的特徴は問題にならない。フクヤマの論点は、本質論的な見方から、人間を全体として見る実存論的視座に移っている。人間が人間であるとは、まさにそうであることによって、それ自身が他の動物からの大きな「飛躍」なのである。人間が人間であることの尊厳は、まさにこの飛躍のゆえに存在する。

人間としての飛躍が他の動物との不連続性を示していると同時に、生命としての連続性という側面もある。発生生物学者の三木成夫は人間の胎児の顔を正面から見ることによって、それが魚類から両生類や爬虫類の段階を経て哺乳類の顔相へと変化し、最後に人間の顔がそこから現れてくる姿を活写している。^⑥このように観察したとき、個としての人間の出生は、類（種）としての人間（人類）誕生ということにもなる。人間として生まれることは、連続と続いてきた生命進化の先端に位置していることを示し、実はそこに人間存在の尊厳と人間生命の尊厳とが切り離すことができない視点を見出すことができるのである。

しかし人間にあっては、発生の最初期の段階から人間的な要素が存在し、その発達の全段階で人間を目指している。人間の生命は初期胚の段階から、すでに「人間」の生命である。だが

それは、他の動物とも類似した発生過程を、部分的に共有する人間の「生命」である。「人間」の生命か、それとも人間の「生命」か。やはり、ここにも連続性は存在する。アクセントの置きどころによって見方が変化するに過ぎず、そこから言えることは、人間の尊厳と人間生命の尊厳を分かつことの困難さである。

二 出生の人間存在論

出生は生まれる側から見た言い方であるが、同じ出来事を産む側から見れば出産となる。出生とは生命と生命の連続性を最も感じさせる出来事だが、この出来事は産む側にとつては生命と生命の分離でもあり、生まれてくる子供はこの分離によつて、人間の生命としてこの世界へとつながることができると。

人間の出生には、存在論的な意味がある。このことを明快に述べたのがアーレントである。彼女は『人間の条件』の中で、「人間は一人一人が唯一の存在であり、したがって、人間が一人一人誕生することに、なにか新しいユニークなものが世界にもちこまれる」と述べている。人間の出生という事態は、一人一人が固有性をもつた存在として世界に登場し、それは世界の刷新でもあるということの意味する。

ここでも、生物学的出生だけが人間の出生ではないことが分かる。人間の出生は誕生以後も社会的出生として続くものである。「言葉と好意によつて私たちは自分自身を人間世界の中に

挿入する」と述べたあと、アーレントはこの挿入が第二の誕生に似たものだと主張するが、それはむしろ人間学的意味では第二の誕生そのものと言つてよい。それは自分が仲間に加わろうと思う他人の存在によつて刺激されたものであり、この衝動はそもそも自分が生まれたときに世界の中にもち込んだ「始まり」から生じている。アーレントは次のように端的に主張する。

「始まり」としての活動が誕生という事実に対応し、出生という人間の条件の現実化であるとするならば、言論は、差異性の事実に対応し、同等者の間にあつて差異ある唯一の存在として生きる、多数性という人間の条件の現実化である。⁽⁹⁾

ヘレン・ケラーはこのことを劇的な形で表明した。音も光も無く、悲しみも愛情も生み出されなかった世界に生きていた彼女に、世界が言葉で語られ、成り立っていることを示してくれたのが、七歳になるかならない頃に冷たい井戸水が手に流れ落ち、それが water という名前をもつことを知らされたときの体験である。⁽¹⁰⁾それはサリバン先生を通じて、言葉の神秘の扉が開かれた瞬間であった。言葉と活動を通じて開かれてくる新たな世界。それは人間固有の世界開放性の出発点にもつながるものである。これこそまさに、人間としての象徴的な出生とも言えるのではないだろうか。

三 いのちとその縁

ここで再度、生命へとアクセントを置き直して考察してみよう。人間の生命は時に超越的な存在の相の下に見られるが、この生命をとくに「いのち」と呼ぶ。それは、神仏からの与え、恵み、借り物等々と表現され、時に死をも超えた性格をもつ。

人間の「いのち」には、独自の人間学的要素がある。すなわち、人間の生命とは単なる生命にプラスαされた生命である。このプラスαの部分には、精神、靈魂、理性、人格という要素があてはめられてきた。これらに対応し、時に対立させられる要素が人間における自然、身体（肉体）、情念、衝迫である。この際、従来よくなされてきたように、両要素が二元論的に対立する関係にあるというのではなく、むしろ本来、それらの調和ある統合的關係から考えていくべきではなかっただろうか。「いのち」はその統合的な包括的關係概念となる。人間にあって、「いのち」とはどこまでも人間的刻印を押された生命、すなわち人間的生命のことである。

我々は諸々の縁による「いのち」のつながりの中で生きていく。そして、出生とは人間の「いのち」がこの世に送られて（贈られて）くることに他ならない。「いのち」の縁は三層構造を有している。身体的いのちの縁が遺伝子・血でつながる肉親の縁であり、心理的いのちの縁が子育てによつてはぐくまれる育ての縁であるとすれば、魂のいのちの縁は神仏（超越的存在）

が媒介して結ばれる宗教的な縁となろう。多くの宗教はそれぞれの仕方、神仏を究極の「親」と見立てているが、神仏から見れば人間はみな「子供」であり、どんな人々も自分の「兄弟姉妹」になる。そこからすれば、多くの宗教の「いのち」観は人類全体に及ぶ広がりをもったものである。

この視点は、先に、人間の出生がたしかに生命発生的には「人類誕生」とも重なる出来事でもありと示唆したことと重なってくる。生命の連続性に焦点をあてれば、人間は一代で終わるのではなく、類的存在として存続することにより、新しい生命は人類の一員になるからである。それゆえ、たとえ自分自身の血を分けた子供がいなくても、個人の出生は人類にとつて意義のある出来事である。

この縁こそ、あらゆる縁の基層にある「いのちの縁」とも言うべきものであつて、この縁では、人間である限り、誰もが皆つながっているものである。今、求められているのは、「いのち」の縁でつながる存在としての責任倫理、ケアの倫理である。

四 「いのち」の縁による人間学

人類という視座は、一つの飛躍であつた。この飛躍は受胎の瞬間において成立していると思われるべきである。というのも、人間は胎内では他の動物と似た形態で成長過程をたどるにしても、最初から人間になるべくして人間として出生するものだからである。人間の胚や胎児の「尊厳」は、人格の潜在的可能性

を秘めた「いのちの尊厳」でもある。

それゆえ、ヒトという生命存在の上に人間という階層が乗っているというわけではなく、すでに種（ヒト）であることでもその出発点から人間である。たとえ、そこに精神や理性や人格の片鱗が見られなくとも、人間としての尊厳を有するものである。人間が人間である限り、どの人間も人類における唯一無比な存在である。人間性 *Menschlichkeit, humanity* の思想もそこに立脚する。

ただし、こうした思想は倫理的理想であるがゆえに、人々がここまで現実には達してきたかどうかは別問題である。多くの社会において、妊娠中絶や嬰兒殺しさえ、必ずしも道徳的に拒否されるものではなかった。人々がどのように考えていた背後には、胎児や新生児がまだ人間であって人間ならざるもの、つまりヒト生命存在ではあるが、いまだ自分たちの同朋になっていない存在と見ていたからである。我が国の民俗学の知見が示しているように、出生してもしばらくの間は異界からきた不分明な存在と見なされていたのである。

胎児は、母体内にあっつていまだ「見えない存在」である。現在、超音波診断で胎児の様子が可視的になったとは言え、出生を経てはじめて「見える存在」になる。このようなこともあつてか、日本ではかつて、子供が「あの世（異界）」から「この世（現世）」にやってきた存在と見なす考え方があつた。たとえ無事生まれてきたとしても、子供はいまだ存在が不安定であ

り、この世に生命が定着して一人前の人間になるには何年も要する。「七つまでは神のうち」という言葉も、幼児死亡率が高かった時代状況を反映したものであるが、まさに出生後の人間の子供の存在論的な不安定さを示している。人間の子供は、そうした時期を通過しながら、徐々に人間の世界に仲間入りしていくのである。そうしたことから、出生前の胎児はまだ捉え難い存在である。それゆえ、そうした存在はいまだ「それ」としてあり、「何か」として問われることもある。

出生とは「それ（何か）」が「なんじ（誰か）」になる過程である。この過程自体は生物学的には徐々に進行していくが、我々はそれに節目を入れて段階を整えてきた。子供の命名、「七五三」のお祝い、元服や成人式等がまさにそうした一人前の人間になるための節目となる。このようにして、「それ」が独立した人格をもつ存在、すなわちより人間らしい存在へと生成していくことになるのである。

ここでは種としての人間一般は背景に退き、個々の人間が前面に登場してくる。人々の中にあつて、その人間は唯一無比な存在として迎えられる。自分たちの仲間であるという認識が人類規模まで拡大し、包括的一人称複数としての「我々」の一員として考えるのが上記の人間性の思想なのである。この人間性の思想を生命という視座から見たものが、「いのち」の縁による人間学になるのだと言えよう。

おわりに

人間の生命は、他の動物とも重なる側面をもちつつも、別格な「いのち」として位置づけられる。人間にとって出生は生物学的出生に止まらない、その後も続く社会的出生も含めて、人間の生命の出生なのである。人間は特定の歴史的・文化的の世界の中に投げ込まれるが、その中で唯一無比な新しい存在としてあり、そのような者として自らも歴史と文化に参与し、これを形成していく。人間であることは人間に成る（生成することである。出生はこの人間の生成を現実化する「いのち」の契機なのである。

- (1) ミヒャエル・ラントマン『哲学的人間学（第三版）』（一九五五年）谷口茂訳、新思索社、一九九五年、一五頁。ここから、人間とは「自己自身を完成するという課題を自分のうちに見いだす存在である」という、彼の人間の定義も出てくる。
- (2) アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か―新しい人間像のために』（一九四四年）高木正孝訳、岩波新書、一九六一年、六一頁。
- (3) ポルトマン前掲書、一一五頁。
- (4) ラントマン前掲書、一九〇頁。
- (5) フランシス・フクヤマ『人間の終り―バイオテクノロジーはなぜ危険か』（二〇〇二年）鈴木淑美訳、ダイヤモンド社、二〇〇二年、二〇〇頁。
- (6) 三木成夫『胎児の世界―人類の生命記憶』中公新書、一九八三年、一〇六頁以下を参照。
- (7) ハンナ・アレント『人間の条件』（一九五八年）志水速雄訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、二八九頁（邦訳著者名はアレントとな

っている）。

- (8) アーレント前掲書、二八八頁。
- (9) アーレント前掲書、二八九―二九〇頁。
- (10) ヘレン・ケラー『奇跡の人―ヘレン・ケラー自伝』（一九〇三年）小倉慶郎訳、二〇〇四年、三四―三五頁。

（かねこ・あきら、倫理学・哲学的人間学、天理大学おやさと研究所教授）